

おおさか人物百科

与謝野晶子

おおさか人物百科

与謝野晶子 ①

六男六女を産み

仕事に社会運動に大活躍

私は女子短大に勤めていたころ、学生たちから「尊敬する女性は」と聞かれたら、即座に与謝野晶子だと答えていました。明治から昭和初期にかけて、こんなに素晴らしい女性は、他にはおりません。12人の子どもを産み、11人を立派に育てあげた、これだけでもたいしたものですよ。

- 26歳 次男秀
 - 29歳 長女八峰・次女七瀬
 - 31歳 三男麟
 - 32歳 三女佐保子
 - 33歳 四女宇智子
 - 35歳 四男アウギユスト
 - 37歳 五女エレンヌ
 - 38歳 五男健
 - 39歳 六男寸(生後死亡)
 - 42歳 六女藤子
- もちろんレンジでチンの時代ではない。電化・ガス製品や、紙おむつにミルクなどあるはずはない。八峰・七瀬の双生児が生まれたころは、胸と背に二児をかかえ、両手に長男・次男をぶ

らさげて買い物にでかけ、七輪をパタパタあおいで湯をわかし、あかぎれたらけの指でおむつを洗う毎日です。さらに経済能力のないぐうたら亭主鉄幹を支え、次々に芸術的香気を放つ短歌を詠む。女子教育に力を入れ、女性解放運動にも参加、おまけに『源氏物語』はじめ古典の現代誤訳に多大の業績をあげている。これはもう人間わざとは思えません。

今号から少し長くなりますが、彼女の生涯をたどるので、とりわけ若い女性の皆さんに、私たちはどう生きるべきかを考えるきっかけにしてみたいと思います。筆者としては大満足です。

晶子は明治11年(1878)12月7日、堺の甲斐町の菓子匠鳳宗七の三女に生まれました。母は後妻の津祢で、父32歳母30歳

のときの子どもで、本名は志ようといひます。後に彼女は
 我の名に太陽を三つ重ねたる
 親ありとしも思はれぬころ
 と詠んで、本名は晶だといひて
 いますが、これは「志よう」に自分で「晶」の漢字をあてて飾ったつもりです。

曾祖父が始めた菓子匠 大店の三女として誕生

晶子の曾祖父鳳宗助は鳳村(現・堺市南部)の出身で、若いころ大坂に出て淡路町にあった有名な菓子商「駿河屋」に奉公主家に認められてのれんを分けてもらい、心齋橋筋に店を構えます。彼の次男初代宗七(祖父)は堺に駿河屋支店を起し、洋酒を混ぜた菓子など考案して好評。その次男二代宗七(父)が店を継ぎ、とくに小豆を散らしたようかん「夜の梅」がヒット商品になり繁昌、さらに和菓子やワインも並べて菓子では堺一の大店になりました。

二代宗七の母(祖母)静はなかなかの女丈夫で、宗七の兄が文芸・風流に凝って店の経営に向いていないとみるや、さつさと





おあさか昔と竹藪

297

文 三善 貞司(地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子

隠居させ、次男の宗七を当主にしたほどのやかまし屋です。宗七の最初の妻(名前不詳)が気に入らぬ。おっとりとして上品だが、店をとりしきる力はないと「てる」はなの二人の娘が生まれてきたのに離縁させ、捜しまわって働き者の津祢をみつめて、後妻に迎えています。

二代宗七と津祢夫婦には、長男秀太郎、次男玉次郎(二つで死亡)、次が晶子、三男壽三郎、最後に里の五人の子が生まれます。

このなかでとびきり学問ができたのは秀太郎で、後の東京帝国大学教授になり、電気工学では海外にも知られた科学者です。彼は妹の晶子をかわいがりますが、鉄幹が大嫌い。妹がとびだして東京の鉄幹のもとへ走ってからは兄妹の縁を切り、父宗七の葬儀のおり子どもをつれてかけつけた晶子に参列もさせず、罵倒して追い返しています。

駿河屋を継いだのは弟の壽三郎さぶろうです。彼は姉晶子と大の仲良しで、兵役にとられて日露戦争の旅順攻撃に参加したおり、弟を心配して詠んだ詩が、大変な物議をかもしたあの有名な「君死に給ふこと勿れ」です。

おおさか人物百科 (149)

与謝野晶子 2

**読書、作文が好きな晶子
高女では理数系にも才能発揮**

後に彼女はこう詠んでいます。「父に好かれていない」、敏感な晶子は、幼女のころからこう思い込んだようです。

明治11年(1878)12月7日、晶子が生まれたとき父の鳳宗七は、「なんや、女の子か」と顔をしかめました。前妻との間に、てるはなの二女がおり、後妻の津祢は秀太郎・玉次郎と男子を続けて産みましたが、玉次郎が早世したため、ぜひもう一人ほしいと思っ

堺の宿院小学校に入学、同級生に今では「日本のチャップリン」と呼ばれる喜劇役者曾我廼家五郎(本名和田久一)がいました。彼は「鳳さんふくろう ほうほう ほう」とはやしたてて、彼女の髪の毛をひっぱったそうです。

あなかしこ楊貴妃のごと斬られむと思ひたりしは十五の少女との詠歌が残っています。『長恨歌』を習ってロマンに酔う少女の面影が、よく出ています。読書・作文の大好きな彼女の学業成績は普通で、堺高等女学校(現・府立泉陽高校)に進学したいと言ったとき、担任はびつくりして、無理、無理と手をふつたそうです。ところが見事に合格、成績も向上しとくに数学・理科が抜群にできました。

なかでも晶子は『源氏物語』が気に入りました。といっても今のように訳本があるわけじゃない。それで『湖月抄』(江戸時代の注釈書。北村季吟著)を参考に読んで読んだそうで、大変な学力的持ち主です。源氏が読めれば、『枕草子』や『更級日記』『伊勢物語』は簡単だ。独学で女学校の国語教師も顔負けするほどの、古典の教養を身につけていきます。

**「東京で勉強したい」
堺の短歌サークルに加入**

現代文学にも興味を持つ。森鷗外の「めざまし草」、島崎藤村らの文芸雑誌「文学界」も読みはじめ、「電燈は夜の12時に消えた。それまでふとんをかぶって読みふけた。樋口一葉の『たけくらべ』『にがりえ』を読んだときは、体が熱くなるほど感動し、若い女も文学をやる時代になったの





おおさが昔と今誌

298

文 三善 貞司(地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子

だ、私も東京へ行こうと思った」と書いています。

女学校を卒業した晶子は母に、「お兄ちゃんのように東京で勉強したい」とねだりました。しかし母は、いつも木で鼻をくくるような調子で、「あきまへん、男と女はちがいます。あんたは勉強せんでよろし」と言い続けました。

こうして卒業後も店の経理を手伝っていましたが、明治27年こつそりと「文芸倶楽部」に投稿した短歌が入選し、掲載されたのです。

露しげきむぐらが宿の琴の音に秋を添へたる鈴虫の声(むぐらが宿「は貧しい家」)

これが初めて活字になった彼女の短歌で、16歳の作です。嬉しくてたまらぬ晶子は、母の反対を押しきって翌年、強引に「堺敷島会」という堺にあった短歌サークルに加入しました。

時鳥鳴く一声に雨晴れてあや珍しき三日月の影

小倉山ふもとの里はもみぢ葉の唐紅の時雨降りたり
などを会誌に発表します。

おおさか人物百科 (150)

与謝野晶子 3

鉄幹の歌に目から鱗 浪華青年文学界に参加

明治30年(1897) 晶子19

歳)、東京帝国大学在学中の兄秀太郎が送ってくれた読売新聞(当時文芸欄に力を入れていた)が、晶子の文芸観、いや、人生を大きく変えるきっかけとなります。

新聞には聞いたこともない与謝野鉄幹という青年が

春浅き道灌山の 一つ茶屋餅食
ふ書生袴ついたり

などの、今までは歌材にならなかった十数首の歌を発表してい

たのです。それまでの晶子は、花鳥風月(自然の美しい風景)を詠む江戸時代以来の伝統的情绪が、短歌の世界だと思ひ込んでいました。

「実に無造作だ。技巧など要らない。これなら誰にでも詠める」

晶子は目から鱗がとれたような気がします。これが彼女が初めて鉄幹の名前に出会ったきっかけでした。

この年、堺に電話局が誕生します。夜間の交換手(かけるほうから相手の電話番号を聞き、コードを差し込んで通話させる

役)は、堺中学校(現・府立三国丘高校)の苦学生(働いて学費を得る生徒)森崎富寿(とみひさ)で、昼は通学、夜も休まず仕事にがんばる健気な姿が、写真入りで新聞に出せました。感動した晶子は、「よるべなきたななし小舟」との匿名で、激励の手紙を出します。

「さはらば消えむ露の玉づさ おぼつかなくも しめしまるらせ候……」

で始まる文章と、あの晶子独特の細いみみずが這ったような細い筆の文字を見て、富寿は仰天します。長い巻紙の最後まで、なにが書いてあったかは、さっぱり彼には理解できなかつたそうです。これが初めて晶子の書いたラブレターです。つまり勝手に空想して理想の男性像を作りあげ、それに恋するタイプの女性でした。これは鉄幹を恋し

たときも同じです。

またこの年には、大阪に小林政治(実業家)、中村吉蔵(作家)、高須梅溪(評論家)を中心に、大阪では最初の文学結社「浪華青年文学界」が誕生、堺にも河井醉茗(めい)、河野鉄南らが集まってその支部が結成されました。晶子は父宗七の猛反対を押しきって、支部に参加します。

やは肌の熱き血潮に―― 青年僧河野鉄南への恋心

河野鉄南は、堺の覚王寺の住職河野桂仙の子ともで本名通該(つうがい)、少年時代から鉄幹の親友でした。鉄幹は大阪市の安養寺(住吉区)の住職安藤秀乗の養子になっていた時期があり、秀乗は桂仙と親しかったから、よく少年鉄幹をつれて覚応寺に遊びに来ており、同年代の鉄南と鉄幹は仲好しになりました。2人とも詩歌が好きだったので、

「ぼくは本名の寛の上に鉄をつけて鉄幹、きみの寺は南にあるから鉄南にしろ」

と鉄幹は主張して、ともに鉄の号をつけます。「鉄」は鉄のように堅い友情のシンボルです。





おあさが昔さかた

299

文 三善 貞司(地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子

鉄南は晶子より4つ年上、色白の無口で真面目な青年僧です。男性とのつきあいを許さなかった父宗七も、「覚王寺の若ぼんやったらまちがいない」と許してくれたから、晶子は彼に短歌の添削を乞います。そのうち例の空想癖がつり、会合で会えばほとんどことばをかわさないのに、3日に一度のわりあい得手紙を出します。晶子の自宅から覚王寺までは歩いて10数分の距離ですから、これは異常です。内容も激烈で、有名な、

やは肌の熱き血潮にふれもみ
でさびしからずや道を説く君
は、鉄南にあてた恋歌です。

また晶子は詩も書きだしました。浪華青年文学会の機関紙「よしあし草」に、「鳳小舟」のペンネームで発表します。

別れて永ききみとわれ
今宵あひ見し嬉しさを
汲みても尽きぬうま酒に
薄くれなるの染めいでて
君が片頬にびんの毛の
春風やはくくろよぐかな

島崎藤村の詩にそっくりですね。なお戦争で堺はひどい被害を受けましたが覚王寺は無事で、往時の風情をとどめています。

おおさか人物百科 (151)

与謝野晶子 4

7歳で一家離散の鉄幹、 独学で女学校の国語教員に

明治33年（1900）晶子22歳）与謝野鉄幹は、短歌革新雑誌「明星」を創刊。女性の歌人が少ないので紹介してほしいと、親友の覚応寺（堺市）の河野鉄南に頼みます。鉄南はさっそく晶子を推薦しました。同誌2号に彼女の、肩あげをとりて大人になりぬると告げやる文のはづかしきかなが掲載されています。

「願生寺」住職の与謝野礼蔵れいぞんの四男に生まれました。本名寛。父礼蔵は京都府与謝郡加悦村の出身で、倒幕運動にも参加していますが、明治維新後は出家し、同寺の住職になりました。学問を好み和歌が上手、生涯約3万の歌を残します。のちに鉄幹は父の十三回忌供養に630首を選び、『礼蔵法師歌集』を自費出版しています。

家から預かった金を使い込み、寺から追放されました。一家は離散し7歳だった鉄幹は、安養寺（大阪市住吉区）の住職安藤秀乗の養子にやられます。ありし日は破れ衣に継ぎあてて乞食法師と人の見し父ですが、貧乏のどん底にいたことがよく分かります。個性の強すぎた鉄幹は、養父と大げんかをして寺をとびだし、やはり養子にやられていた3人の兄たちの養家を転々とするうち、独学で教養を身につけ、父の才能を継いだのか誰も詠まなかつた独特の短歌を作るようになります。

明治22年（鉄幹21歳）鉄幹は次兄の赤松龍麿が住職を努める山口県徳山市の徳応寺を訪ね、同寺が経営する私学白蓮女学校の国語科教員になります。ここで卒業生の浅田サダと恋愛し、女兒ふき子が生まれるが生後1カ月で死亡したことから浅田家の両親と不仲になり、サダと別れます。ところがすぐに、今度は生徒の林滝野と愛しい同居、物議をかもしました。

「恋をせねば歌は詠めぬ」 自我の発現——『明星』創刊

林家は土地の資産家で娘3人、父の林小太郎は養子になるなら結婚を認めようと言いますが、大言壮語型の鉄幹は田舎に住んでも面白くない、東京に出て文芸者になると拒んで上京。翌年落合直文（国文学者）の『浅香社』に参加、「二六新聞」の記者になって生活の資を得ながら、痛烈に旧来の和歌を攻撃し、花鳥風月に代わる革新的な短歌運動を始めました。

彼を蛇蝎だかつ（へびとさそり）のように嫌う人も多かったが、この無鉄砲な若者はカリスマ的人気を集め、同29年『東西南北』『天地玄黄』等の刊行した詩歌集は予想以上に売れ、同32年には前衛的な文学集団「東京新詩社」を設





おおさが昔と竹藪

300

文 三善 貞司(地域史研究者)
切り絵 塩入 みや子

立、会誌「明星」を創刊します。

「短歌は我が心の燃ゆるま
まを歌ふ。我流の歌、自我の歌でな
ければならぬ。約束ごとや基準
は一切不要。人生を赤裸にさら
すことをよしとする」

「恋をせねば歌は詠めぬ。ゲー
テやバイロンの如き恋こそ、真
の自我である。恋を邪なりと閉
じ込める暗い日本の窓を開き、
さわやかな朝日を入れることが、
詩人の義務だ」

「掛詞、縁語、枕詞などにあけ
くれる老人趣味から、短歌を奪
回するため明星は生まれた」

こう叫ぶ明星創刊号は、たつ
たのタブロイド版14頁、定価6
銭の小雑誌です。参加した晶子
は発行資金に18円も寄付してい
ます。これは大変な額です。もつ
とも費用の大半は、娘かわいさ
のあまり林小太郎が出ており、
発行人は林滝野名義でした。

「養子縁組みを承知しなさい。
明星が軌道に乗るまで、私が援
助してあげるから」

小太郎の好条件も鉄幹は聞く
耳を持たぬ。ひとりだけでやると拈
大運動を始め、大阪に来て晶子
と運命的な出会いをしたのです。

おおさか人物百科 (152)

与謝野晶子 5

鉄幹、登美子との出会い―

「われはつみの子になり申候」

明治33年(1900)8月、与謝野鉄幹は創刊した「明星」の同人募集のため来阪、北浜の平井旅館に宿泊します。親友の覚応寺(堺市)住職河野鉄南は、晶子をつれて訪れました。

彼女は銀杏返しいちょうがしの髪、紺がすりの単衣ひとえ、紫繻子むすずの友禪ゆうぜんに合わせ帯。鉄幹は白がすりの着物に黒い緞あつの夏羽織、長身で細身。初めて出会った印象を後に晶子はお坊さんみたいと語っています。

「山川さんを紹介しよう」

初対面のあいさつもそこそこに鉄幹はこう言って、隣室から山川登美子を呼び寄せます。

「いつもお歌を拝見していますので、初めてお会いしたような気がしません。これからはお姉さまと呼ばせてください」

ずばぬけてきれいな美少女タイプの登美子が、深々と頭を下

げたので、晶子はドギマギします。ときに鉄幹27歳、晶子22歳、登美子21歳の出会いでした。

それから鉄幹は2週間大阪に滞在しますが、晶子は5回、登美子は6回も会っており、8月6日には浜寺の寿命館で3人だけの歌会を開いています。

紫の襟に秘めずも思ひ出し君ほほゑまば死なむともよし

鉄幹

松多き高師たかしの浜のまさご路じにわが反故歌はこを埋めて往になむ

登美子

師と呼ぶを許し給へな紅にぶさせる口にていかで友といはれむ

晶子

また8月9日、3人は住吉大社に参拝。

新しく開きましたる歌の道に君が名呼びて死なむとぞ思ふ

登美子

星の夜の無垢むくの白衣しろぎぬかばかりに染めしは誰がとがにおぼす

晶子

などと詠みます。まるで恋歌のオン・パレードですね。

手紙好きの晶子は鉄幹に、猛烈なラブレターまがいの手紙を出し続けます。また河野鉄南にあてた有名な「つみの子手紙」も書いています。

「あなた様のころよきますらをぶりの御文に われは今何もつつまず申上もつしあべく候 われはつみの子に候 与謝野様に介し給ひしは あなた様に候 つみの子になりしも それにもとづき候 高師の浜かげにささやき受けしより われはただ夢のごとつみの子になり申候 昔の兄様さらば この夕べ…つみの子」

3人での京都紅葉見物 晶子の一生を決めた一泊

鉄幹への押さえがたい恋心を鉄南に打明けた手紙ですが、理性ではどうすることもできない燃えあがる炎のような乙女の気持ちに、胸が熱くなります。

しかし鉄幹は徳山にいて、返事どころではありませんでした。妻の林滝野が萃あつむと名付けた男子を出産したからです。前回述べたように滝野の父林小太郎は徳山の資産家で、鉄幹が刊行し

た「明星」の発行資金も援助、そのかわり林家のむこ養子になるよう、再三説得します。ところがのぼせあがった鉄幹は、徳山にひっこもるつもりはさらさらない。ついに小太郎と鉄幹は大げんかになり、資金はいらぬ、滝野も嫌いだと啖呵を切つてとびだしました。なお滝野は後に萃をつれて3歳年下の詩人正富汪洋と再婚します。彼は若山牧水らと活躍した文人です。「鉄幹さんは萃はかしこい。いい子だ。父より偉くなる」と言つて出ていきました。滝野はこう語っていますが、鉄幹はひどい男ですね。

同年11月、徳山から東京へ戻る途中、鉄幹は京都で下車し、登美子と晶子を呼び出して、京都の永観堂の紅葉見物にでかけ、粟田山の旅館「辻野」に一泊します。

三たりをば世にうらぶれしはらからと我まづいひぬ西の京の宿

晶子の詠歌ですが、この一泊が彼女の一生を決定づけました。ただし鉄幹は気性の激しい晶子よりも、色白で控えめな登美子のほうが好きで、二人の楽しそうな笑い声に晶子はジェラシーをいだき、ヒステリー気味だったといわれます。



おおさが昔と今 301

文 三善 貞司(地域史研究者) 切り絵 塩入 みや子

晶子のライバル 山川登美子

鉄幹への想いを秘め、許嫁と結婚

話題を変えて晶子のライバル 山川登美子を紹介します。

彼女は明治12年(1879)福井県小浜の銀行家山川貞蔵の4女に生まれました。本名とみ、号は白百合、晶子よりひとつ年下、弟にプロレタリア作家として知られる山川亮がいます。

父貞蔵は英語教育に熱心で、当時英語教育では有名だった大阪の梅花女学校に進学させます。ここで登美子は学校長の成瀬仁蔵(女子教育の恩人)後に日本女子大学を創設)になみはずれた歌才を認められ、卒業後鉄幹の「明星」の同人に推薦されました。ですから晶子よりは早い加入で、白百合のペンネームで秀歌を発表、鉄幹はじめ男性同人たちは、彼女をマドンナのように大事にします。

前号でふれた明治33年11月の永観堂紅葉見物の服装は、「えび茶袴と白がすりの着物、靴をはき

長い豊かな髪に大きなリボンをつけ、「いかにも良家の子女タイプ」だったそうで、おたいこを締め束髪に結った彫りの深い顔立ちの晶子も、「まあ、きれい」と思わずみとれたそうです。気のせいか鉄幹は登美子と話すときよく笑ったので晶子は嫉妬し、登美子なんか鉄幹をとられてたまるかとカッカとなったといわれます。

ところが、紅葉見物の10日後、登美子は突然堺の晶子の実家を訪れ、「小浜に帰ってフィアンセと結婚します。お世話になりました」と、深々と頭をさげたので「驚いてよく聞くと、幼いころから彼女には親の決めた親族のひとり山川駐七郎という許婚者がおり、年内に挙式の手はずが進んでいてどうにもならないとのことでした。」

「おめでとう！でもお名残惜しいわ」と言いながら、晶子は天にも昇るような気持ちになります。

「白百合のきみ けふとひ給ひき あす帰国し給ふとなり 高まげにていとどねびまさり給ふやう 美しくおはしき 同じ姿にて百合持ち給ふ写真 もたらし給ひき」

彼女はこう書いています。このときの登美子の歌が、それとなく紅き花みな友にゆずりそむきて泣きて忘れ草摘む

です。まさに名歌です。髪長き少女と生まれ白百合に額は伏せつつきみをこそ思へとの歌もあり、登美子もまた心の中では鉄幹を愛していたことが、よく分かります。

清楚哀婉な短歌を残し 30歳の若さで病没

その後の登美子の短い人生を記しておきます。わずか2年の結婚生活で、夫の駐七郎は病死しました。明治37年上京し日本女子大学に入学、鉄幹・晶子夫妻と再会し「明星」に復帰、清新な短歌を次々に発表、晶子も負

い目を感じていたせいか全面的に応援し、翌38年登美子と増田雅子を誘い、3人で共同歌集「恋衣」を刊行、評判になります。登

美子は白百合と題して131首を発表、生前の歌集はこれだけです。なお大学は、学生のくせに恋歌を詠むとはけしからぬと、登美子と雅子を停学処分にしています。おそろしい時代ですね。

しかし美人薄命は世の常です。晶子に優る浪漫派歌人と絶賛された登美子は、夫駐七郎から感染した結核が悪化し、京都の姉の嫁ぎ先に寄寓し療養生活に入ります。「微熱白燈のやうに点る」彼女は苦痛をこう書いていますが、全身ひどい倦怠感に包まれ発熱する美しい横顔は、雪女のように妖艶でした。

我が死なむ日には斯く降れ京の

山白雪高し黒谷の塔(金戒光 明寺の文珠塔のこと)

帰り来む御魂と聞かば凍る夜の千代も御墓の石抱かまし

などの秀歌を詠み続けた登美子は、同42年4月、

矢の如く地獄に落ちる躰きに石とも知らず拾ひぬるかな

を残して絶命します。まだ30歳の若さでした。

「晶子奔放華麗 登美子清楚哀婉」

2人の短歌の質の違いを、文芸評論家たちはこう記しています。



おおさが昔さ竹藪 (302)

文 三善 貞司(地域史研究者) 切り絵 塩入 みや子

おおさか人物百科 (154)

与謝野晶子 7

明治34年(1901)晶子23歳
鉄幹28歳)1月、神戸の新詩社文学同好会に出席した鉄幹は、晶子を誘って昨秋山川登美子を加えて3人で宿泊した京都粟田山の辻野旅館に、今度は2人だけで宿泊します。

滝野と別れ、私と結婚して— 資金、萃への未練…悩む鉄幹

このとき詠んだ短歌が、のちに刊行される晶子の最初の歌集『みだれ髪』の題名になる

黒髪の千すじの髪のみだれ髪
かつ思ひみだれ思ひみだるる

です。晶子がどんなに思い悩んだかは、この一首だけで十分理解できます。妻子ある男と老舗の商家の生娘が外泊するなど、人倫にそむくといわれた時代です。姦通罪という法律もあります。これはもう女ごころといったなまやさしいものではない。死んでもいいほどの気持ちだったことでしよう。別れた直後、
君さらば粟田の春のふた夜妻

またの世までは忘れ居給へ
との歌を、東京の鉄幹にあてた手紙にそえています。このあとも、

春の国恋の御国の朝ぼらけし
るきは髪か梅花のあぶら
道をいはず後を思はず名を問

はずここに恋こふ君と我見る
などと詠み、次々に手紙を出して早く林滝野と別れ、自分と結婚するよう迫っています。

これを知った父宗七は猛烈に怒り、ふしだらな娘を外に出すなど部屋に閉じ込め、外出禁止を命じて見張りまでつけます。

この姉を庇ったのが、弟の篤三郎です。慰め励まし文通の手伝いまでします。後に戦場に召集された彼を心配して詠んだ詩が、あの有名な物議をかもした「君死に給ふこと勿れ」です。

入籍してはいないとはいえ、鉄幹と滝野との離婚は、スムーズには運びませんでした。父小太郎の援助がなければ、「明星」の発行資金は底をつきます。いや、

肝心の鉄幹が滝野との間に生まれた萃への未練が、長引かせたのです。鉄幹は晶子を才はじけた女弟子としてつきあいたい、ところが好きな登美子に去られたはずみで関係した、浮気性の男だから、本心はこうだったかもしれない。

怪文書「文壇照魔鏡事件」 去る滝野、上京する晶子

そんな優柔不断な鉄幹を、「文壇照魔鏡事件」が襲います。鉄幹の女性関係のだらしなさを攻撃した匿名の怪文書がばらまかれた事件で、

「教え子と次々に関係をもち、資産家の林家をだまして明星の発行資金を出させ、今度は堺の豪商の娘を誘惑、重婚の大罪を犯しながら、資金集めに利用している」

との内容です。しかも中傷やデマを加え、恋愛至上主義、ロマンス主義を唱える男の仮面をひっぱがすと、単なる女たらしではないかと大げさに書いたので、世間は大騒ぎになります。

若者たちにカリスマ的人気のあった鉄幹は、詩歌の革新を唱え保守派を痛烈に罵倒しただけに、敵も多い。ここぞとばかり鉄

幹の人間性をたたいたから、明星の女性会員たちは眉をひそめて脱会してゆく。かつとなった鉄幹は、やけに晶子のことが詳しく出ているので、これは昔の仲間ではライバルの「新声」を刊行している高須梅溪や中根駒十郎の仕業にちがいないと、いきなり2人を名誉毀損で告訴裁判沙汰になります。結局証拠不十分で敗訴し、事件はうやむやで終わりますが、これにも相当の時間と費用を失いました。

いっぽう赤ん坊の萃を抱いて東京の鉄幹宅に押しかけていた滝野は、この騒動を契機に、鉄幹の直言壮語癖や、女性の弟子たちとはしゃぐ姿に、次第に違和感を覚えるようになります。彼女は冷静で理知的な性格です。いつときは女学校の恩師鉄幹に熱をあげますが、この人、あまり生活能力はないし、父が別れる別れると言うのも無理はないわ…と思いはじめます。

同年6月、鉄幹から滝野と萃が故郷の徳山に帰ったとの知らせを受け取った晶子は、今だと決心し鞆ひとつで上京します。狂ひの子我に焰の羽かるき百三十里あはただしの旅
は、そのときの詠歌です。



大阪府立泉陽高校の中庭には、創立70周年記念行事(昭和46年)のひとつとして建立された「君死に給ふこと勿れ」を刻んだ碑がある。高校の前身は、晶子が卒業した堺女学校。

与謝野晶子文芸館 企画展

晶子さんのお宅拝見

開催中— 9月11日(日)

8/27(土) 午後2時~学芸員によるギャラリートーク



本展では、エピソードを交えて晶子さんが使っていた愛用の家具や食器など約50点を展示します。「情熱の歌人」としてだけではなく、生活者としての晶子さんに触れ、その幅広い活動の背景には、家族への思いと家族からの支えがあったことを知っていただく機会となれば幸いです。

ワークショップ 手作り和菓子体験

会場= サンスクエア堺

晶子さんは子どもたちに手作りの和菓子を作っていました。家庭でもできる和菓子作り体験をしていただきます。

平成23年8月21日(日) 13:30~15:30

- ・講師=橋本通子氏(管理栄養士、専門調理師、料理研究家)
- ・定員30名(先着順 事前申込み必要)
- ・参加費=1,500円
(晶子館、ミュシャ館もご覧になれます)
- ・共催=(財)堺市中小企業勤労者福祉サービスセンター

堺市立文化館 与謝野晶子文芸館

大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺式番館
TEL.072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分

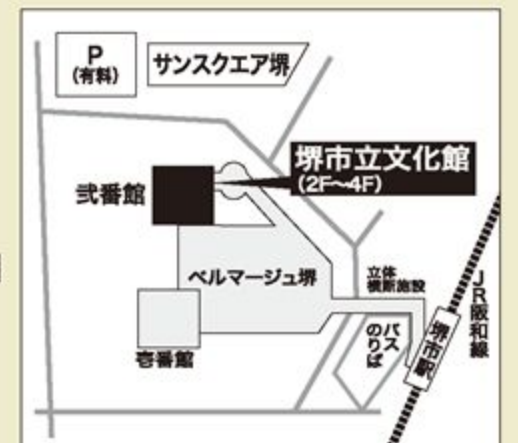
開館時間: 9時30分~17時15分(入場は16時30分まで)

休館日: 月曜日、休日の翌日(土日の場合は開館) 8月9日

入場料: 一般500円、高・大生300円、小・中生100円

(小学生未満、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料)

*アルフォンス・ミュシャ館もご覧いただけます。



晶子と子どもたち(大正3年)
提供 日本近代文学館

おおさが昔と今

303

文 三善 貞司(地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、体調不良によりしばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (155)

与謝野晶子 8

明治34年(1901)晶子23歳
鉄幹28歳)6月、堺の菓子商駿河屋の令嬢鳳晶子は靴ひとつで家出、東京の与謝野鉄幹のもとに走りました。

靴ひとつで家出、鉄幹のもとへ初の歌集『みだれ髪』を出版

今ここにかけり見すればわが情闇をも恐れぬめしひに似たり

こう詠んで上京した彼女は、まず「明星」同人でいつも庇つてくれた栗島狭衣(大女優栗島すみ子の父親)宅を訪ね、鉄幹にとりついでほしいと頼みます。まさか晶子が来るとは思わなかった鉄幹は驚き、数日後多摩渋谷(東京都多摩市)の自宅に招きますが、手鍋さげてもどころか無一物で押しかけ女房になった晶子は、鉄幹の貧乏ぶりにびつくりしました。経済観念ゼロの彼は、収入と支出のバランスがとれず、好き放題に暮らすから家計は火の車、豊かな

商家の娘とはあまりにもかけ離れた世界でした。

それでも鉄幹はなにもかも捨ててとびこんできた晶子に感動し、晶子の歌集を出そうと言いだします。それが彼女の愛情に報いる唯一の方法だと思つたようです。だが資金はない。鉄幹は無断で次号の明星発行資金を流用したから、同人たちは怒ります。元来鉄幹は自己中心的で勝手気まま、仲間の言うことなど耳にもとめません。それに妻子を追い出して情婦の晶子をひきこんだ道ならぬ恋だ、なにが恋愛至上主義だ、スキャンダルではないかと息まく者も出てきます。

狭衣は無論、主要同人で親友の窪田空穂、水野葉舟らも「それだけはだめだ」とひきとめるのを無視し、8月5日、発行資金を転用して晶子の第一歌集『みだれ髪』を出版します。縦長の小型本で138ページに399首収められた書物です。

歌集への賛否両論―生活をささえ多忙な日々

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ
で始まるこの歌集は、まず世間の好奇心を集め、評判になります。恋による女性の解放、因習に閉じ込められた性を太陽のもとにさらそうとする内容に、歌壇の大御所佐々木信綱は顔をしかめ、

「この娼妓夜鷹はらの目にすべき乱倫の言ぞ。淫を勧めんとする不義徳義、あに以て美の高尚を為すべけんや。この書猥行醜悪、人心に害あり、世教に毒あり」と酷評します。なかには高山樗牛のように、

「晶子の才能秀絶、歌詞高く情清く、風格具へたり」とほめる者もいたが、インテリ

の大半はモラルのない不倫の書と軽蔑します。しかし、今冷静に振り返ってみると、この29年後に歌人斎藤茂吉が、

「早熟の少女が早口でものを言ふやうな歌風。天下を風靡し賛否両論喧しく、反発する者も眼の色は驚いてゑた」と書いてるのが、的を射て

いるように思います。ひところ俵万智の歌集「サラダ記念日」が大変な話題になりましたね。あれと同じです。

あまり不倫、ふしだらと非難するので、上田敏(詩人・当時東大講師)が、

「恋情ひどいとけなすが、百人一首もそうではないか」と、晶子を弁護しています。しかし若者たちは熱狂的に歓迎し、『みだれ髪』は売れに売れ、「明星」発行資金は回収されてお釣りがでる。会員希望者も増え、2百名にふくれます。

翌35年入籍が終わり、鉄幹・晶子は正式の夫婦になります。しかし生活は苦しく、連載①で記したように次々に子どもが生まれ、超多忙の毎日でした。

鉄幹は「明星」を編集・発行し、文芸講演にでかけてだぼらを吹いていけばよいのですが、晶子はそうはいかない。炊事・洗濯・編物等の家事労働は、電化された現在とは比較にならぬ。紙おむつもミルクもない育児に疲労困憊しながら短歌を詠み文章を書いて生活費も稼がねばなりません。ぐうたら亭主鉄幹を支えるのも大変。堺の本店の令嬢には過酷すぎる毎日でした。



千里南公園(阪急北千里線南千里駅下車北へ3分)には、歌集『みだれ髪』の代表的な歌のひとつ、「やははだのあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君」が刻まれた歌碑がある。園内にはその他、万葉集や松尾芭蕉、小林一茶など16基の石碑があり、拓本採集が自由にできる。



緑豊かな公園は、家族連れやバードウォッチングを楽しむ人たちが散策している。



日常、小さな子どもたちに着物を引っ張られても胸がはだけないように、襟元が崩れないように縫い付けられている着物もあり、晶子の生活ぶりがよくわかります。

一見、与謝野家が裕福だと思われがちですが、子どもたちに普段おもちゃを買ってあげることもできず、晶子は着物や櫛などを売ってクリスマスにだけプレゼントを買っていました。

(文・森下明穂／与謝野晶子文芸館図録より転載)

資料提供：堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺式番館
TEL.072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分



裏集『みだれ髪』初版表紙(デザイン:藤島武二)
晶子の本の装幀は美術的にも優れているものが多く、内容や雰囲気をよくあらわしています。

おおさが昔と今

304

文 三善 貞司(地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、体調不良によりしばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (156)

与謝野晶子 9

明治37年(1904)晶子26歳
鉄幹31歳)9月、「明星」に発表した晶子の詩「君死に給ふこと勿れ」が、大変な社会問題になりました。

戦場の弟を思う姉の詩が 忠君愛国に背くと社会問題に

当時日本は国運を賭してロシア帝国と戦争中で、とくに軍港旅順に面した二〇三高地の攻防戦は熾烈をきわめ、バルチック艦隊が到着するまでに攻略せねば、日本の敗戦は一目瞭然です。將軍乃木希典は再三肉弾攻撃をくり返し、5万9千人の死者を出します。この攻撃軍に堺の生家「駿河屋」を継いでいる新婚早々の弟の籌三郎がいると聞いた晶子は、黙ってはおられなかつたのです。

「あゝをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなけれ
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも
親は刃をにぎらせて

人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや」
で始まる長詩は、新妻の泣く姿を思いださせ、父は亡くなり残った白髪の母は、店ののれんはお前が死ねばどうなるかと切々と訴えています。その中の、「すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でまさね
かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ」
とある部分が、忠君愛国に酔う人たちの怒りを買います。天皇陛下万歳と叫んで戦場で死ぬのが男子の本懐だとされた時代です。大町桂月(評論家)明治時代の国民精神の象徴的存在)は、晶子を「乱心賊子」と呼びわりますから、いきりたつた国粋主義者たちは、恥知らずの国賊だ、たとえ女子なりともかかる不忠義

裏な奴は、即刻始末するべしとまで騒ぎたてます。
今度は晶子がびっくりしました。弟の安否を心配する姉の気持ち素直に表現したつもりでしたから次号で、

「たいさう危険なる思想と仰せられ候へども、死ねよ死ねと申せしこと、何事にも忠君愛国の文字や教育勅語を引用することの流行は、かへつて危険に候はずや。私の好きな王朝の書き物に、人を死ねと申すこと書き散らしたる文、見当らぬやう心得候。いくさのこと多く書きたる源平時代にも、さやうのことあるまじく…」

と弁明したので桂月らはますます立腹し、論争というより鉄幹・晶子を責めなじり、結局鉄幹は弁護士をつれて桂月を訪ね、妻の舌足らずを陳謝します。

反戦思想か感傷か： 戦争の最中に見せた文人魂

戦後、反戦平和運動が盛んになり、晶子のこの詩はふたたび問題になりました。ある者は反戦思想のさきがけだとほめ、またある者は単なる女性の感傷に

すぎぬとたたきますが、昭和35年(1960)佐藤春夫(詩人・小説家)は、こんな主旨を述べています。

「無論乱心賊子ではないが、反戦・平和主義でもない。ただやたらと天皇をかつぎだして言論を圧迫した権力者や、軍部に対する反発はあったろう。晶子には明治天皇逝去を悲しむ歌、飛行機事故死の木村中尉を嘆く歌などもあり、反戦主義者だったとはとうてい思えぬ」

しかし私は、春夫は戦後の言論自由の時代だから、こんな気楽なことが言えたのだと思います。あの日露戦争の最中にこんな詩を詠む晶子の文人魂はすばらしい。畏敬すべき女性です。

蛇足を加えます。詩に出る新妻は「せい」と言い当時17歳、お腹に赤ちゃんがいました。何度も書いたように、籌三郎は鳳家で唯一の姉の理解者で、父の眼を盗んで鉄幹との交際に力を貸した弟です。2年前に父宗七は死亡、老母を助けて生家の菓子商「駿河屋」の経営に当たった大黒柱です。これらの事情も念頭に置いて、「君死に給ふこと勿れ」を鑑賞すべきでしょう。

君死にたまふこと と勿れ

(旅順口包圍軍の中に在る弟を歎きて)

與謝野晶子

あゝをとらうとよ君を泣く
君死にたまふことなけれ
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや

堺の街のあきびとの
舊家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなけれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとも何事か
君知るべきやあきびとの
家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなけれ
すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でまされ
かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ

あゝをとらうとよ戦ひに
君死にたまふことなけれ
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたたまへる母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守り
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりけり

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君わするるや思へるや
十月も添はてわかれたる
少女をころを思ひみよ
この世ひとり君ならで
あゝまた誰をたのむべき
君死にたまふことなけれ

「明星」明治37年9月号に掲載された「君死にたまふこと勿れ」

資料提供…堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1の2の200ベルマージュ堺式番館
☎0722225533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分



「明星」明治33(1900)年4月～明治41(1908)年11月(復刻版、臨川書店刊)

おおさが昔と竹藪

305

文 三善 貞司(地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、体調不良によりしばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (157)

与謝野晶子 10

明治38年(1905)晶子26

歳)1月、晶子は日本女子大学学生山川登美子と、登美子の同級生増田雅子の3人で、合同歌集『恋衣』刊行、明星女流歌人のロマンの結晶だと高く評価されます。登美子については連載⑥で紹介しましたから、今回は雅子にふれておきます。

晶子、登美子と並ぶロマン歌人家を捨て結婚、「スバル」に参画

彼女は同13年大阪の道修町の葉種問屋「増田商店」の主人増田宇兵衛の次女に生まれました。本名まさ。母さが早く死亡したため相愛女学校を中退させられ、主婦がわりを務めますが、投稿した短歌を与謝野鉄幹が認め、「明星」の同人になります。同37年父の猛反対を押し切って日本女子大学国文科に入学、ここで登美子を知り、登美子の紹介で晶子とも親しくつきあいました。

『恋衣』には「みをつくし」と題

して、

白梅の衣にかをると見しまで
よ君とは言はじ春の夜の夢
はじめ114首を掲載。晶子・登美子とは甲乙つけ難い濃艶な恋歌だと評価されますが、当局は女学生のくせに恋歌とはけしからぬと登美子とともに停学処分しています。そんな時代でした。

同40年大学を卒業するころ、明星同人の茅野蕭々に求愛されます。雅子は27歳、婚期おくれを心配していた父ですが、結婚は絶対許さぬと気色ばみます。彼が3歳年下であること、まだ東京帝国大学学生で生活能力がないことなどが理由です。しかし蕭々の親友安倍能成(後の学習院総長・文部大臣)が、彼は死ぬ覚悟で恋をしたと語ったほどの熱情に負けた雅子は、家を捨て結婚を選びます。

翌年赤ん坊が生まれ、蕭々は第三高等学校(現・京大)でドイツ文学を教授。やがて夫妻は北

原白秋・吉井勇らと「スバル」を創刊、詩歌・小説・翻訳と本格的な文学活動を始めました。

母校の教授に就任し

童話、随筆と、活動を広げる

大正6年(1917)蕭々は慶応大学教授に招かれ、ふたたび一家は東京に戻り、雅子は岩波書店から歌集『金沙集』を刊行します。

十七や難波は古き中船場すだれの奥に琴弾きにけり
張り抜き虎など吊るし葉草の匂ひしめらる大阪の家
むづがりて張子の虎の耳を引く子のつぶら眼に柔かき風
などの短歌に、父に叱られとびだした故郷大阪への愛着と郷愁が、ひしひしと感じられます。

同10年彼女は母校日本女子大学教授に就任。「春草会」「茅花会」等の文芸サークルも指導、新聞・雑誌にエッセイや童話を寄稿するなど活動範囲を広げます。夫の蕭々もドイツ留学を経て独文学の権威者となり『ファウスト物語』『リルケ詩抄』『令嬢ユリエ』『若きヴェルテルの悩み』等の名訳を次々に発表、また『ギョエテ研究』『現代文芸思潮』とい

った本格的なライフワークにもとりくみました。

2人の夫婦仲は友人もうらやむほです。

「妻としても母としても最高の女性だが、学問文芸の伴侶として、まさに掌中の珠を得たような気分である」
蕭々はこうのろけています。

「ゲーテではない。ギョーテが正しい」と言い張って、学者たちと論争した堅物の男がです。

昭和20年(1946)空襲で被災した夫婦は、日本女子大の寮に仮寓しますが、極端な食糧不足で栄養失調になり衰弱、翌21年8月蕭々は63歳で死亡、わずかその5日後に雅子も急死しました。夫の葬式のおりはまだ元氣だったので、「あんなに仲の良かった二人やさかい、ひとりやったら淋しいやろと雅子はんきつとついて行ったんや」と、大阪の親類たちまでうわさします。女学生のくせに恋歌などけしからぬ、ふしだらな女だと非難された女流歌人の生涯は、こうでした。

さて話を晶子と鉄幹にもどします。順風満帆だった「明星」が、光を失いはじめたのです。

堺 晶子を歩く

晶子は東京に住む鉄幹の元へ走るまでの23年間を、堺で過ごしました。古代より集落を形成し、近世からは貿易による経済力を元に自由都市として発展した堺。彼女はこの街で、先進の気概と豊かな文化を糧に成長しました。秋の1日、晶子の面影をたずねて歴史とロマンの街を歩いてみませんか？



南海本線堺駅西口広場
海の方を向いて立つ晶子の像。台座に彫られた歌は、「ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲(明治38年『明星』)」



徒歩10分

晶子の生家近くにある**山之内商店街**。堺市内で最も古い時期に形成され、かつては大阪難波の心斎橋と並び称された。晶子の詩歌が書かれた40枚の垂れ幕が、通りを飾っている。



徒歩3分



開口(あぐち)神社

社伝によると、創建は神功皇后の時代にまで遡り、地元では「大寺さん」と呼ばれて親しまれている。晶子も祭事の折々に立ち寄ったことだろう。



▲大人の背丈よりも大きく立派な狛犬。子連れなのが珍しい。「吠」形の方は、手に玉を乗せた姿。江戸末期の漁業関係者の寄進で、当時の堺港の繁栄ぶりが伺える。



江戸末期に作られた手水舎に置かれている手水桶にある十字の印。江戸初期に禁制になるまで堺はキリシタンの多いまちだったことから、隠れキリシタンと関係があるのでは…という人も。

「右そてつ 左ふじ」
妙国寺近くの粋な道標。建立(嘉永五年)は、ペリー来航の前年。



晶子と鉄幹を引き合わせた河野鉄南氏が住職だった**覚応寺**。界隈は寺が立ち並び、昔当時の風情が色濃く残る。境内の歌碑は「その子はたちくしにながるくるかみのおごりの春のうつくしきかな(明治34年『みだれ髪』)。毎年、命日の5月29日「白桜忌」が催される。

阪堺電車「宿院」乗車、「神明町」下車 徒歩5分

徒歩5分



甲斐町西の**生家跡**。説明板の左隣に歌碑がある。「海こひし潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父母の家(明治38年『恋衣』)。こちら側は裏口にあたり、道路をはさんで反対側の歩道あたりが生家の正面だった。



南海本線浜寺公園駅
1907年に立てられた駅舎(設計:辰野金吾)は国の登録有形文化財。明治33年8月、浜寺の寿命館で開かれた歌会で、晶子と鉄幹は初めて顔を会わせた。



右は**浜寺公園**にある歌碑「ふるさとの和泉の山をきはやかに浮けし海より朝風ぞ吹く(大正8年)」。

阪堺電車「妙国寺前」乗車、「浜寺公園」下車

おおさが昔さ竹藪

306

文 三善 貞司(地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (158)

与謝野晶子 11

明治38年(1905)日露戦争が終結したところから、社会状況や人々の思考も大きく変わり、文学の面でも「明星」のロマンティズムなど色あせていきました。

「明星」廃刊。 晶子人気と失意の鉄幹

鉄幹と人気を二分した青春の詩人島崎藤村は、詩から離れて自然主義文学に転向、尾崎紅葉や正岡子規も病没し、いつまでも明治のロマンにしがみついている鉄幹に、若者たちは魅力を感じなくなつたのです。かつて鉄幹と九州を共に旅し、紀行を通じた作品を発表していた北原白秋、吉井勇、木下杢太郎らも新詩社から去つていきます。一方晶子の人気はますます高くなり、ロマンに代わる新しい文学的テーマを模索して焦る夫鉄幹の心を、いつそういらだたせる原因になります。

君なきか若狭の登美子白玉のあたらし君さへ砕け果つるか
これは鉄幹の悼歌ですが、砕け散つたのは鉄幹の方でした。41年11月には、「明星」が百号で廃刊となり、鉄幹は本名の寛にもどると宣言しています。晶子は生活費から多くの子どもたちの養育費まで作らねばならぬ小説・評論・童話、なんでも注文が来るとひきうけますが、寛には仕事がありませんでした。「記者が来る。用件は晶子ばかり。来客も晶子が目当て。束ねた手紙も晶子宛。晶子はチャブ台を片づけながらペンを走らせる。寛は椅子に座り、煙草を吸い、新聞を隅々まで読む。何も頭に入らない。晶子が声をかける。うるさい。子どもが話しかける。お母さんに言いなさい。ポケットにいくらのお金があれば、パイと出てゆく。無いときはタンスをかき回す」

こうなると当然夫婦仲は冷えてきます。寛はやたらと皮肉をとぼし晶子の心を削り取る。やけくそになつてすぐ自分で自分を嘲り、黙り込む。このころ晶子は八峰・七瀬の女子双生児を出産、子どもは4人になり、歌集『舞姫』『夢之華』を出版、さらにユニバーサリスト教会付属の「閨秀文学会」(教子に平塚らいてうがいる)で、短歌添削と「源氏物語」の講義を始める超多忙な毎日です。寛はお母さんは偉いとほめるかと思えば、すぐ書いたものに痛烈な罵言を浴びせました。

寛(鉄幹)をフランスへ 歌屏風で費用捻出

晶子が女弟子であったからこそ、寛は輝いていたのです。寛だけではない。晶子にとつても明星でした。ところが今や明星は流れ星となり、太陽の晶子の前では惨めな残骸をさらけだしているだけです。晶子もつらかったが、寛はもっとつらかったことでしょう。悩み抜いた晶子は、ふと机上に置かれた友人小林政治あての夫のハガキに気づきます。このままでは狂いそうだと書いたあと、「仏国へ参り頭脳新しく致度候」と結ばれています。フランスへ行きたい、世界の一流の文学者とひびを交えて語り合いたい、結婚前の寛は何度もこう語り、晶子はまばゆい気持ちで彼の顔を見上げたものです。「そうだ。夫をしばらく解放してあげたい。ヨーロッパに旅行させてあげよう」。

ポストに入れにくい途中、晶子はこう決心しました。今とは違いヨーロッパに外遊するのは、よほどの学者か名のある政治家、あるいは大金持ちでなければ考えられない時代です。晶子の原稿料ぐらいで行けるわけではない。晶子は寛と相談し、費用を作るため「百首歌屏風」の制作にとりかかります。

「夫の遊学費用を補ふため 同好諸氏に屏風相分ち申度候」と記した趣意書を、友人・知人から新聞社・出版社各方面に片っ端から配り、カンパを求めます。晶子が短歌計百首を手書きした歌屏風です。

歌幅などでは2人の共作もみられ、寛の歌は大きく目立つように、晶子のは細い筆で小さく書かれており、彼女の心配りに頭がさがります。

■ 晶子の本と金尾文淵堂

晶子の本の装幀は美術的にも優れているものが多く、その中で最も多く関わったのは大阪の金尾文淵堂という出版社でした。数の多さだけでなく、第1歌集『みだれ髪』や第1評論感想集『一隅より』、最初の源氏訳『新訳源氏物語』と最後の大作『新訳源氏物語』といった、晶子の創作活動の節目となる作品はいつも金尾文淵堂から出版されています。

(文・学芸員 森下明穂：与謝野晶子文芸館図録より抜粋)

堺市立文化館 与謝野晶子文芸館

特別展 「もうひとつの創作—与謝野晶子と文化学院—」

開催中～平成24年1月15日(日)月曜休館(休日の場合は開館)

文化学院は西村伊作が校長となり、与謝野晶子は女学部の学監、鉄幹(寛)は文学部の部長として大正10(1921)年に創設されました。本展では、晶子がどのような学校を理想と考え教育の実践に関わったかがうかがえる、文化学院所蔵資料を中心に自筆資料や写真・書籍など約70点を展示。晶子の教育論・子育てについてのことも紹介します。

講演会 「与謝野晶子と西村伊作」12月17日(土)午後2時～午後3時半

講師：黒川創氏(作家) 会場：当館3階ギャラリー

定員：80名 *事前申し込み必要(応募者多数は抽選/詳細は晶子文芸館まで)

参加費：500円(晶子文芸館、ミュシャ館もご覧いただけます)

※手話通訳あり

主催：堺市文化振興財団、堺市立文化館 共催：堺市立中央図書館



歌集「春泥集」明治44年



歌集「朱葉集」大正5年



「新訳源氏物語」上巻 明治45年



「新訳源氏物語」中巻 明治45年



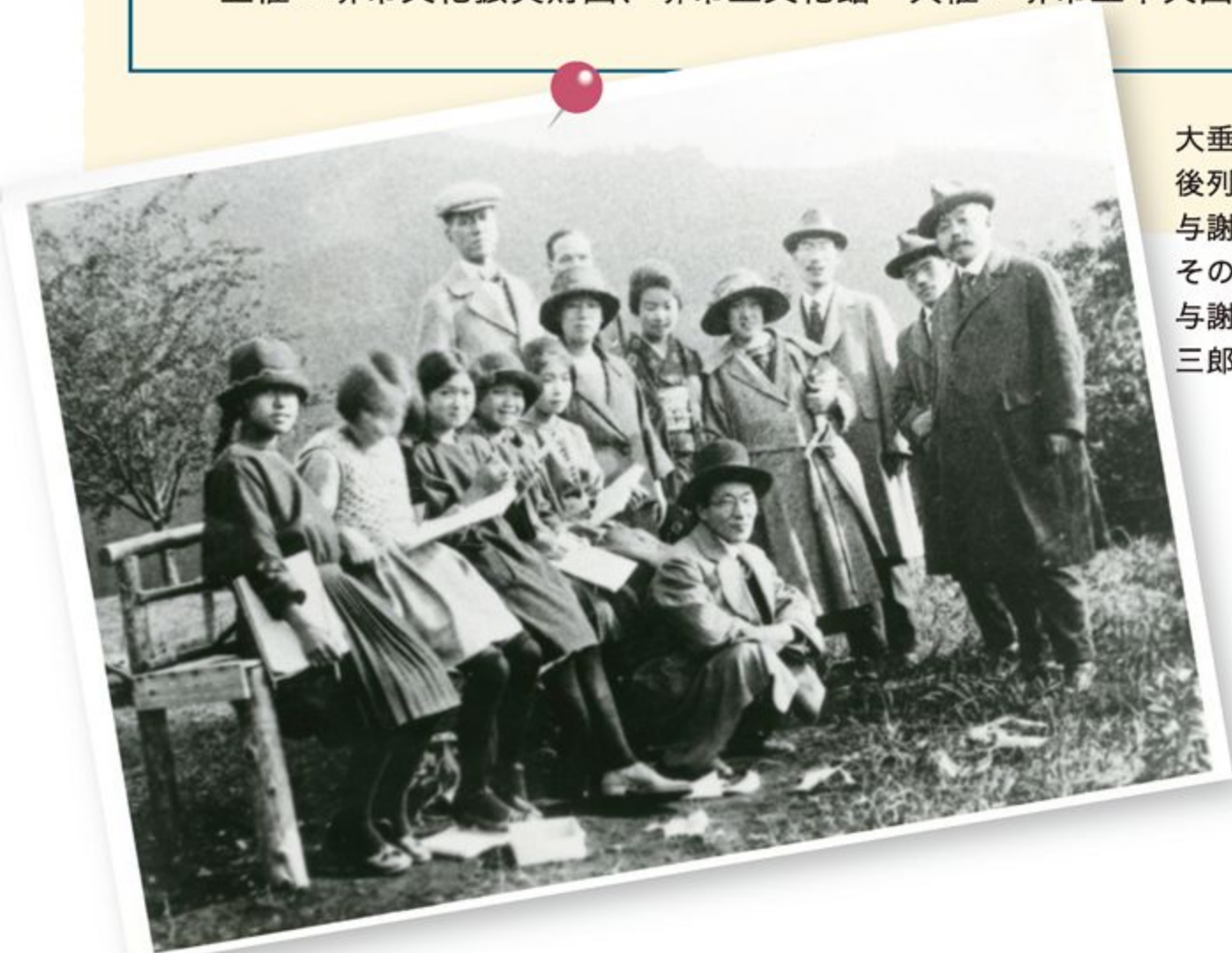
「新訳源氏物語」下巻一
大正2年



「新訳源氏物語」下巻二
大正2年

大垂へ遠足(大正末期)
後列左より、西村伊作、河崎なつ、
与謝野寛(顔半分)、星野立子、
その前でしゃがむのが赤城泰舒、
与謝野晶子、1人おいて十一谷義
三郎、石井柏亭

(写真/文化学院蔵)



資料提供：堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1の2の200ベルマージュ堺式番館
☎072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分

306

おおさか昔と竹藪

文 三善 貞司(地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (159)

与謝野晶子 12

明治44年(1911)6月、女性解放運動の先駆者平塚らいてうが、晶子の自宅を訪ねます。雑誌「青鞥」の創刊号の原稿依頼に来たのです。ときに晶子33歳、らいてうは25歳でした。後にらいてうはこんな思い出を書いています。

山の動く日来たる―

「青鞥」創刊号に詩を寄稿

「私は閩秀文学会で晶子先生の教え子でした。あのころ先生はよれよれの木綿着姿でしたが、(今回は)秋草模様の着物をきちんと召しておられ、まるで別人のように上品でした。私がお頼みするとボソボソと独り言のように、なんで女ばかりの雑誌を出すの、女の天才をここから出すおつもり? だから女はダメねとおっしゃったので、腹が立ちました。先生も女でしょと言いたいほどでした。しかしあれは激励のおつもりだったのでしょう。届けられた詩を見てびっくりしました。私たちの

運動をこれほど短く言ったものはないと、みんな大喜びでした」この原稿がらいてうの書いた「元始女性は太陽であった」で始まる宣言文とともに有名な、あの詩「山の動く日」です。

山の動く日来たる
かく云へど人われを信ぜじ
山は姑く眠りしのみ
その昔に於て

山は皆火に燃えて動きしものを

されどそは信ぜずともよし
人よ ああ 唯これを信ぜよ
すべて眠りし女 今ぞ目覚めて動くなる(ルビ筆者)
らいてうは後に市川房枝・奥むめおらと婦人参政権運動に情熱を注ぎ、女性の自立をめざす社会運動の原点だとされますが、彼女と晶子ではかなり次元が異なります。らいてうは妻子のある森田草平(作家・夏目漱石の弟子)と心中未遂事件を起こし、世間の非難をあびたばかりか草平にも裏切られ、男性憎しから出

発しています。晶子はちがう。鉄幹を愛し妻として献身的に尽くしたのがスタートです。晶子は、
①女子教育の重要性。
②家父長の権限を乱用した子女
③女性の経済的自立。
④夫婦は権利も義務も平等。
⑤夫婦は愛し合い、子どもの教育は共同分担。
⑥一夫一婦制度の厳守。

かけます。船でシンガポールを廻りパリに向かうコースです。夫がいなくなると晶子は、猛烈に恋しくなります。寛もあれほど冷たくあしらったくせに、離れてみると若き日の愛情が甦ってきたのか、やたらと手紙をよこしてきます。手紙なら晶子も負けない。

⑥一夫一婦制度の厳守。
などを主張し、自身12回もの出産を体験したことから、母性保護の重要性、母子年金制度の確立も訴えています。らいてうたち、いわゆる「新しい女」と呼ばれた青鞥グループは、

そのうちに寛の手紙の調子が変わってきます。お前もパリに來い。見せたいものがいっぱいあるから案内する。かならずお前の文学に役立つはずだ…と誘うのです。たしかに寛がパリで見聞したものは、東洋の島国の常識を破るものばかりでした。

「先生は男を立て、女はあとからついていくものと考えておられる。母親の保護を要求すること自体、女を男の付属品だと思われる証拠だ」

と攻撃し、両者譲らず「母性保護論争」に発展しました。

ついに寛の手紙は、
①子どもの面倒は、俺の妹のしづに頼んでおく。
②シベリア鉄道を使え、250円で済む。
③服装は袴と靴だけでOK。あとはパリで揃う。はるかに安い。
と具体的になります。

「見せたいものがいっぱいある」 寛の誘いに晶子もパリへ

この年11月、寛は前回述べた百首屏風歌で得た資金などで、あこがれのヨーロッパ旅行にで

翌45年5月、晶子はウラジオストックに渡り、シベリア鉄道でパリに向かいます。渡欧の費用は、晶子の原稿目当てに新聞社・雑誌社が前借を承知。森鷗外らも援助してまかないました。

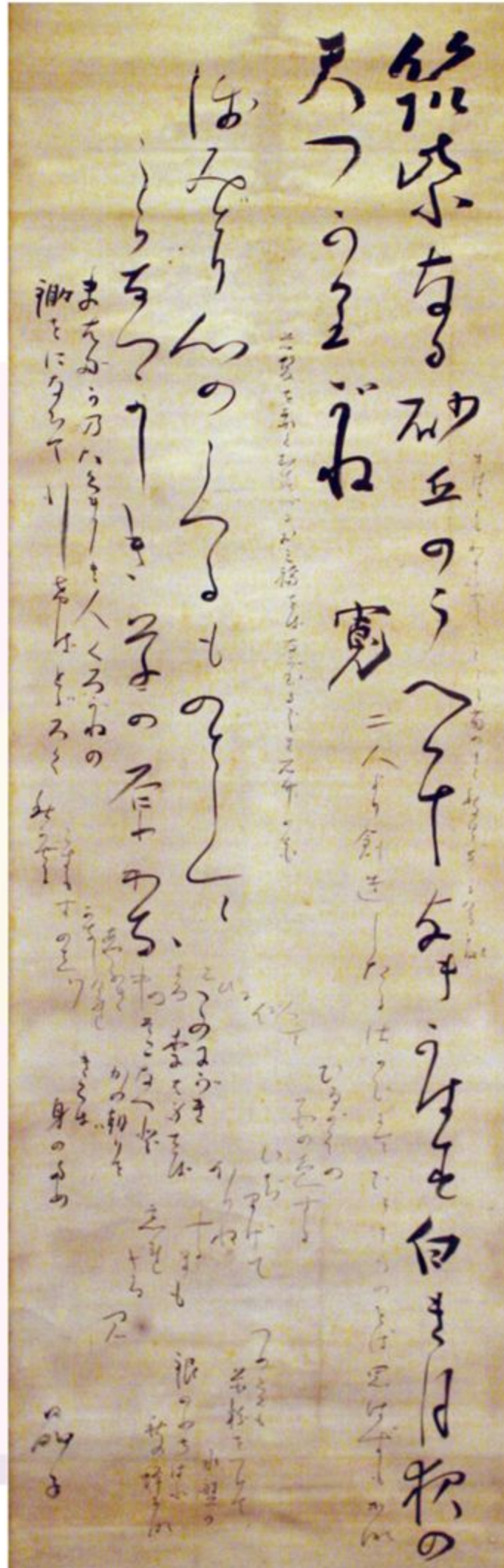
晶子は常に自らが女性であることを忘れず、どんな仕事も謙虚な姿勢でこなしていました。若い女性編集者に、仕事のために徹夜続きでも周囲の人に悟られないように着替えること、時間がなければせめて帯を結び替えなさい、とりパーシブルの帯を贈りました。家事や子育てなど忙しい日々の中で働いていた晶子だからこそ言える言葉でしょう。

帯：扇面模様



筑紫なる砂丘のうへになきかはす白き月夜の天つかりがね
浅みどり心のうつるものとしてうらなつかしき草の道かな

寛 晶子
他



堺にいた頃は字にくせがあり、文学仲間から「読みにくい字」と言われていました。結婚後、晶子の字は次第に鉄幹の字に似てきます。そして、有名人となった晶子は、揮毫や頒布会の機会が多くなり、書き慣れた美しい字を書くようになります。細い筆を好み、日本画に使う面相筆を愛用していました。

歌幅：鉄幹・晶子寄せ書き十首



堺女子短期大学の正門を入ってすぐにある詩碑。「山の動く日」の詩とそのノルウェー語訳が刻まれている。1986年、ノルウェーで18名の閣僚中、首相を含む8名が女性という内閣が誕生。「山の動く日」に込められた晶子の思いが実現したとして、堺のコーラスグループ「晶子をうたう会」がノルウェーに働きかけ、建立が実現した。
最寄り駅：JR阪和線浅香駅下車西へ5分

おおさが昔さ竹鼓

308

文 三善 貞司 (地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。

(おわび) 前回通し番号を間違えました。正しくは「307」でした。

帯・歌幅 (文・学芸員 森下明穂：与謝野晶子文芸館図録より抜粋)

資料提供：堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1の2の200 ベルマージュ堺番館
☎072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分

おおさか人物百科 (160)

与謝野晶子 13

パリでの見聞を生かし、女性の権利・地位向上を訴える

明治45年(1912)5月、先に渡仏した夫の寛が恋しくてたまらなくなつた晶子は、シベリア鉄道に乗り込み、14日かけてパリに到着します。

ああ五月^{さつき}フランスの野は火の色す君もこくりこ我もこくりこ(こくりこは「ひなげし」のこと)

君とゆくノオトルダム^{ノートルダム}の塔ばかり薄桃色に残る夕暮
物売りに我もならまし初夏^{はつなつ}のシャンゼリエの青き木のもと
などの短歌や、

パリに着いた三日目に
大きいまっかな芍薬^{しやくやく}を
帽子の飾りにつけました
こんなことして身の末が
どうなるやらと言いなながら

という詩に、あどけない少女に戻つた34歳の晶子の喜びを感じ

ます。

ベルギー、ドイツ、オーストリア、オランダ、ふたたびパリと旅をしながら、文人・芸術家たちと交流し、あの気難しい彫刻家ロダンに気に入られます。このとき晶子は妊娠中でしたが、ロダンは帰国後生まれた四男に自分の名前オーギュストをプレゼントしてあります。これは大変な好意の表れで、どんなに晶子に親愛の情を持ったかが分かります。

しかし晶子は9月にはマルセイユから乗船し、たった4カ月ちよつとでパリに寛を残し帰国します。その理由は子どもたちが気がかりだったからで、

「風呂に入ると、洗ってやる子どもがいないと泣きだす始末。淋しい淋しいと子どもの名を順に呼んでいた」

と、寛は語っています。母親晶子はこうでした。

ヨーロッパで見聞した西洋女性の地位の高さ、男女同権思想は、晶子の眼から鱗を落とし、新聞や雑誌で女性の権利・地位の向上などを訴え続けます。生硬なプロパガンダではなく、エキゾチックな風俗・風雅を背景に、大好きな西洋の花をおり込むロマンあふれる文章は大好評で、講演や座談会にもひっぱりだこになります。

個性を生かした学校を――本格的な女子教育に着手

大正2年(1913)寛が帰国しますが、こちらは仕事が無い。原稿の注文すらこない。晶子は古典への関心を強め、『新訳栄華物語』を刊行。次に、夫のご機嫌をとろうと二人で手がけた『和泉式部歌集』を出版しました。

おもしろくない寛は同4年、突然政治家になると言いだし、衆議院議員に立候補します。まるでやんちゃ坊主です。それでも晶子は必死になつて資金を集めます。イギリスやフランス型の理想選挙をやりたい。まだ「明星」の鉄幹のイメージは残っているはずだと寛は大言壮語しま

すが、99票で落選(当時は税金年額10円以上納めた男性にのみ投票権がある。日本全国で2万1560名のみ)しました。

「まだまだ日本ではヨーロッパ型の選挙は無理」

「叩頭(ぺこぺこ)することにして戸別訪問するほど、愚劣な行為はない」

晶子はこう書いています。

『与謝野晶子集』『麗女小説集』『わくら草』等の歌集、『新訳、紫式部日記・和泉式部日記』『人および女として』『我等何を求むるか』詩文集『若き友へ』『心頭雑草』あるいは竹久夢二の挿絵で広く知られる童話集『行って参ります』などを続々と刊行し、旺盛な執筆活動を示した晶子は、同10年建築家の西村伊作と「文化学院」を創設、本格的な女子教育に取り組みます。

伊作は自分の長女アヤが女学校に入ったとき、形式と規律ばかりを重んじる画一的な教育に疑問を感じ、個性を生かした自由主義的な学校を作ろうと、晶子に相談したのがきっかけです。場所は東京の駿河台と定め、山田耕筈・北原白秋・石井柏亭・寺田寅彦らも参加します。

与謝野晶子肖像（提供：文化学院）



帰国後刊行した、
 ヨーロッパ旅行の紀行文集
 『巴里より』与謝野寛・晶子共著
 大正2年5月金尾文淵堂刊
 （提供：堺市立中央図書館）

◆ヨーロッパ外遊年表

1912年5月5日東京新橋駅を出発、敦賀港からシベリア鉄道にてフランスへ。5月19日パリ着

1912年

- | | |
|--------------|---|
| 6月5日 | フランス・ロワール湖畔の古城、大聖堂等見物 |
| 6日 | セントヴェルタン村にピニョレ婦人を訪問 |
| 18日 | 印象派詩人のアンリ・ド・レニエを訪問 |
| 23日 | パリ郊外のロダン家訪問、パリのオテル・ド・ピロンでロダンと面会
アミアン市観光/博物館、ゴシック寺院等を見物 |
| 25日
~7月4日 | イギリス・滞在中にウエストミンスター寺院、ナショナル博物館、テート博物館、
サウスケンシントン博物館等を巡る |
| 7月4日
~9日 | ベルギー・王立美術館 近代博物館 美術館などを巡る。
アントワープ観光 |
| 10日
14日 | フランス・パリへ
パリ祭 |
| 9月1日 | ドイツ・ミュンヘンで美術館 離宮
王立醸造所など遊覧 |
| | オーストリア・ドイツ・オランダを旅する |
| ~18日 | フランス・パリに戻る |
| 21日 | マルセイユより平野丸にて海路帰国の途に |

(作成：編集部)



シベリア鉄道を経て寛の元へ向かう晶子が、パリ郊外で車
 中から目にした野に咲く緋色の花、「こくりこ（ひなげし）」。
 花言葉は…「慰め、労わり、思いやり」

おおさが昔さや蔵 309

文 三善 貞司（地域史研究者）

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (161)

与謝野晶子 14

大正10年(1921)晶子は、建築家西村伊作と東京駿河台に、「文化学院」を開校します。

自ら教科書を編集 生徒の創造能力、希望を尊重

「他から強制されることなく、個人の創造能力を本人の希望によつて、自由に発揮できる生徒を養成する学院」

晶子は設立趣意書にこう記しています。今なら当たり前でしょうが、当時の社会通念からみると画期的な方針です。さつそく学監(校長補佐役)になり、「源氏物語」「短歌指導」の講座を持ちますが、ときに晶子は43歳、男子5人女子6人の合計11名の子どもの養育にあたる母親です。また初めて歌集がイタリア語に翻訳されてナポリで刊行されたところで、この超多忙のなかでの学校開設は、とうてい人間わざとは思えません。

大正10年(1921)晶子は、徒を集めてスタートします。教授陣は石井柏亭・山田耕筰・寺田寅彦・有島武郎・北原白秋・河崎なつ・芥川龍之介・それに晶子と夫の与謝野寛が加わるものすごい顔ぶれです。入試もない、制服もない。遅刻・早退自由という風変わりな学校で、あれで教育ができるかいなど知識人まで眉をひそめます。晶子の長女八峰も生徒です。

晶子は古典の新訳にも力を入れます。

「参考書は難かしゆうて読めませぬ。もつと分かりやすく文芸のある訳が必要です」

こう語った彼女は、今まで出した源氏物語・栄華物語・和泉式部歌集等の新訳本を文化学院のテキストに使ってみて、とりわけ明治45年刊の『新訳源氏物語』が不十分なことに気づき、本格的な改訂にとりかかりました。これが「与謝野源氏」と呼ばれる有名な『新訳源氏物語』(決定版)ですが、大正12年9月、関東

大震災で文化学院は倒壊炎上、完成間近の原稿千枚が灰になります。茫然自失した晶子が初めからやり直し、やっと刊行できたのが死ぬ3年前の昭和14年でした。

寛は言語学で慶大教授に 各地に夫婦旅行の足跡

大正10年の11月、晶子は文化学院の教壇に立ちながら、ぐうたら亭主の宝物だった「明星」を復刊させ、寛の短歌を多く掲載します。しかし、時の流れにとり残され、短歌革新どころか今や趣味的雑誌にすぎず、かつての明星ファンのノスタルジアをかきたてるだけでした。

わが歌は人嗤ふべししかれども、これを歌へば自らの泣くも、これは寛の短歌ですが、妻に比べてはるかに影の薄れた老いてゆく彼の姿に、哀愁をおぼえるほどです。

昭和7年(1932)中国との戦争で、3人の工兵隊の兵士が体に爆薬を巻きつけ、要塞に突進して鉄条網を爆破して死ぬという事件が起こります。軍国主義の強い時代で国民たちは感激し、毎日新聞は全国から3人の

兵士を称える歌を募集します。多数集まったなかに「爆弾三勇士の歌」と題した文句なく断トツのすばらしい詩があり、一等賞に選ばれますが、作者名を見て誰もがとびあがりました。与謝野寛と書かれていたのです。どの審査員よりも格上の老詩人鉄幹の気骨に、世間は感嘆の声をあげました。

当時寛は、文化学院から慶応大学教授に栄進し、本格的な学問分野で仕事をしています。短歌や詩ではない。言語学です。とくに『日本語源考』は代表作で、晩年の最大研究テーマだった日本語の源流調査に、情熱を注いでいます。肝心の詩歌はほとんど即興的で、旅に出るは色紙に書いて知人に与える程度、アマの余技のような作ばかりでした。

大正の末から昭和を初めにかけて夫婦仲はひとときは睦まじく、子どもたちも成人し、経済・時間とも余裕ができたせいか、さかんにこの時代珍しかった夫婦旅行に出かけています。全国各地からも招待され、新聞社・雑誌の取材依頼も多く、二人の行動範囲は驚くほど広い。今も全国各地に詩碑や歌碑が残っているのは、その記念碑です。



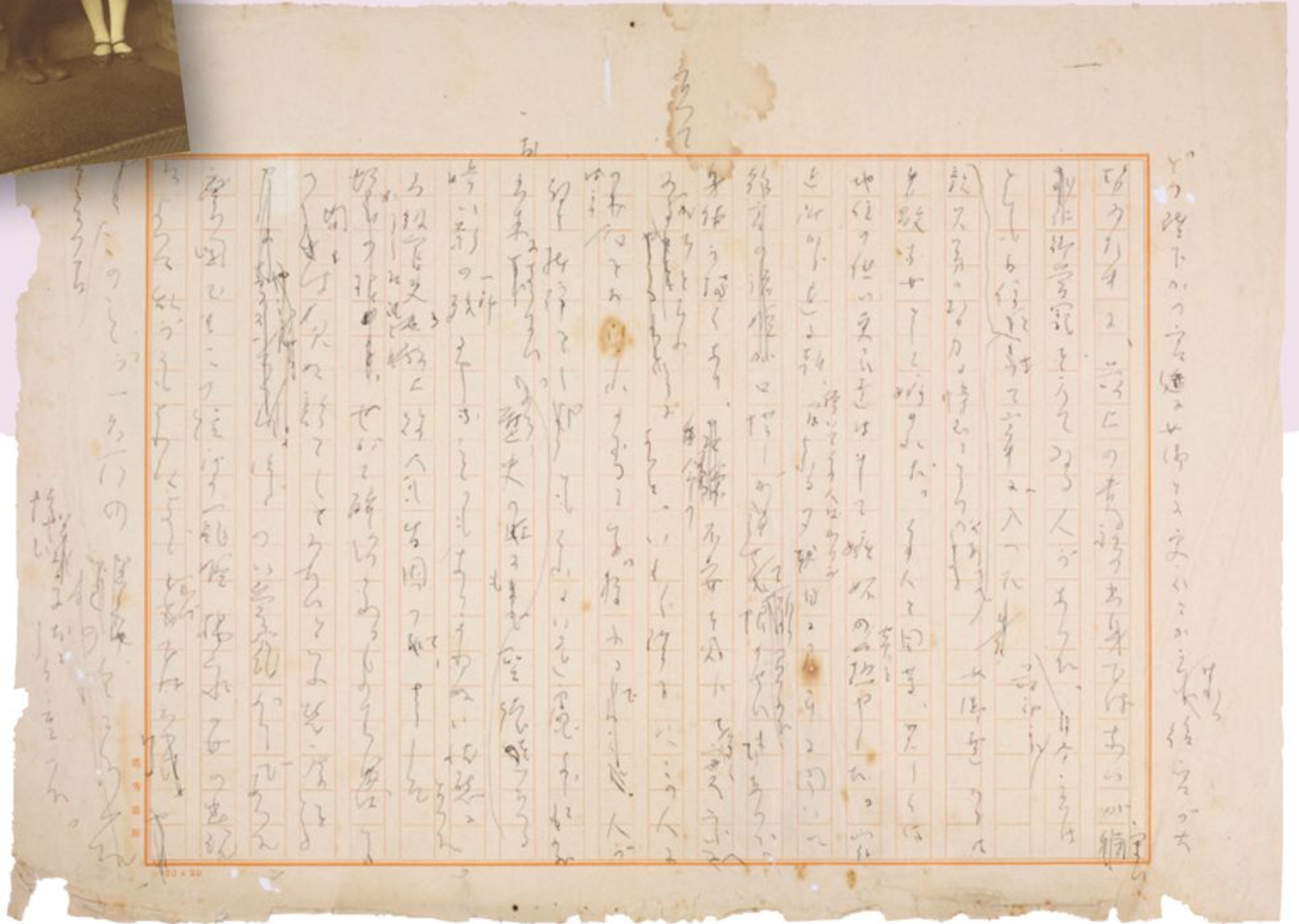
文化学院教授と女学部6回生らと
堺市(与謝野晶子文芸館)蔵

資料提供：堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1の2の200 ベルマージュ堺式番館
☎072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分

◀後方左端で、階段の手すりに腕をかけているのが晶子。

▼10代はじめから多くの古典に親しんでいた晶子は、「源氏物語」の作者紫式部を「私の11、12歳の時からの恩師」と述べています。晶子にとって源氏物語はライフワークであり、こだわり続けた作品でした。(与謝野晶子文芸館図録「堺発 与謝野晶子」より)

原稿「新新訳源氏物語」「桐壺」：堺市(与謝野晶子文芸館)蔵



学碑めぐり



堺市立中央図書館(JR阪和線百舌鳥駅下車)前に、晶子生誕100年記念事業のひとつとして建立された。「堺の津 南蛮船の行き交へば 春秋いかに 入りまじりけむ」の歌と共に晶子のレリーフがある。堺のにぎわいをうたったもの。

おおさが昔と今 310

文 三善 貞司 (地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (162)

与謝野晶子 15

寛の他界、闘病―。渾身の力で

「新新訳源氏物語」刊行

昭和10年(1935)3月、久里浜(横須賀市)の吟行旅行から戻った与謝野寛・晶子に、突然不幸がやってきます。寛が発熱、風邪

だろうと樂觀していたところ肺炎と診断され、同月13日慶応病院に入院、26日に62歳で他界しました。

一人出て一人帰って夜は床師へさき君待ちわびて我は床師へ
一人出て一人帰って夜の泣ける都の西は杉並の家
など、夫への思慕の歌ばかりを詠み続けます。ときに晶子は57歳。彼女の愛情の深さはすぐに『与謝野寛遺稿集』を刊行したことで、よく分かります。

同12年改造社(文芸・哲学書の出版で著名)は、社運を賭して『新万葉集』発行事業にとりかかり編集委員を集めますが、斎藤

茂吉・佐々木信綱・折口信夫・北原白秋・窪田空穂ら男ばかり、女ではたったひとり晶子だけが委嘱されています。つまり彼女が女流歌人のNo.1だったことを意味します。しかしあの世から寛が手招きしているのでしょうか。頑丈だった晶子もめつきりと弱

りだし、この年だけで脳出血、盲腸手術、肺炎と3度も入院しています。

死を予感したのか彼女は、やり残した『源氏物語』の新訳執筆に渾身の力を注ぎました。連載

筆硯煙草を子らは棺に入る名のりがたかり我れを愛できと神田より4時間のちに帰る

14でふれたように。完成まぎわの原稿をすべて関東大震災で焼失したため、やり直そうとしたのです。ときには病床での口述筆記、門人たちと吟行旅行に出ても、車や旅館で筆をとり、下ごしらえはあつたでしようがたった2年半かけただけで、『新新訳源氏物語』全巻(昭和13年10月、14年9月)が刊行されます。今も与謝野源氏と呼ばれる評判の著作は、闘病生活のなかで骨身を削ってなされたもので、これはもう頭が下がるばかりです。

家族・知人・友人・縁者と交歓 医者が驚いた生命力もついに…

これは名横綱双葉山の69連勝を詠んだ短歌です。
同16年、旅に出たいとうわごとのようにくりかえします。子どもたちは医師と相談し、どうせ回復しない病状だから好きなようにさせようと、看護師つきで山梨県の上野原にでかけます。子どもや孫たちも交代で宿泊旅館を訪れ、晶子もこんな楽しい生活はなかったと大喜びではしやぎます。

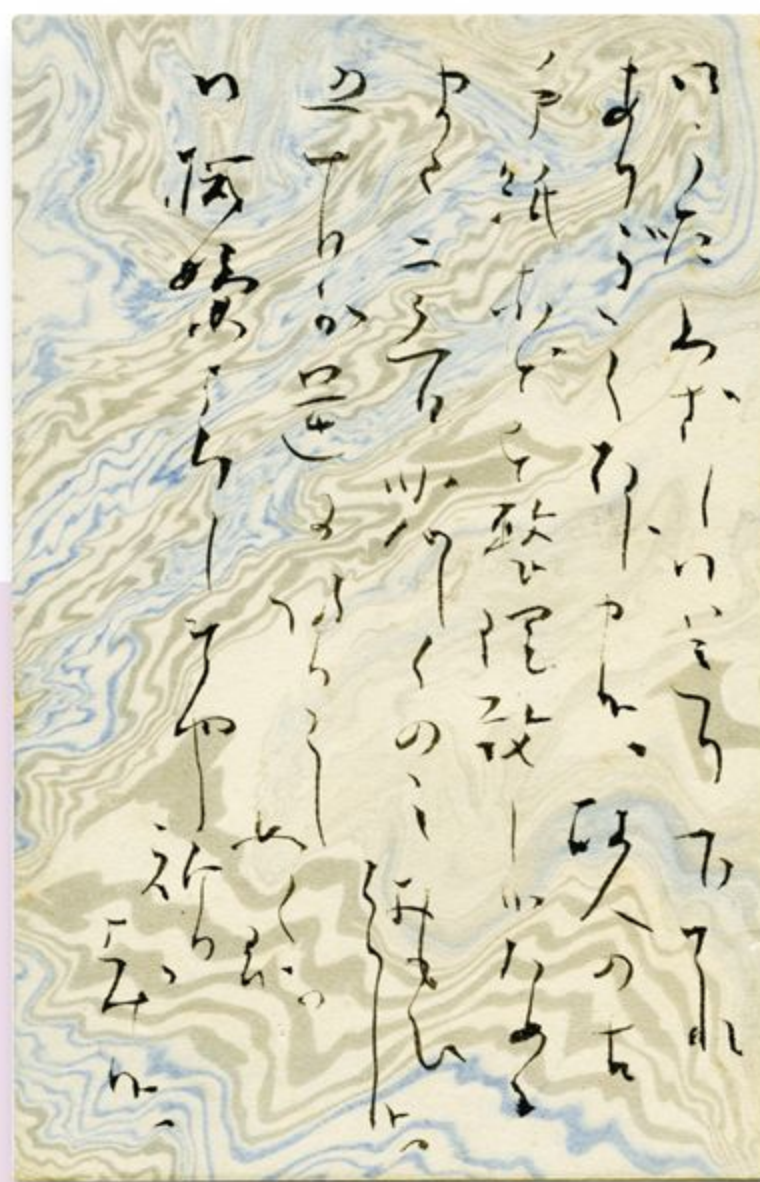
肩の荷をおろし安心したのか翌15年5月、関西旅行から帰宅して入った風呂場で倒れ、左半身不随となりました。脳出血の再発です。同居していた次男の秀夫婦の手厚い看護を受けながら口述筆記で『新選与謝野晶子集』を新潮社から刊行。今まで多忙で聴けなかったラジオに耳を傾け、とりわけ相撲放送を楽しみました。

この年12月8日、日本は太平洋戦争に突入しますが、その前日が晶子の誕生日。熱烈な晶子ファンたちが麻布の料亭に招待し、物資欠乏時代には考えられなかったほどの豪勢なメニューでもてなします。晶子は車椅子で参加、知人・友人・縁者たちも集まり、大いにしゃべり笑い歓をつくしますが病状は悪化、翌年の1月4日、昏睡状態におちいりました。カンフルや酸素吸入でもちこたえ、彼女の生命力に医師も驚いたものの尿毒症を併発、5月29日午後4時30分満63歳で死亡します。

青山斎場での告別式は人波であふれ、高村光太郎の弔詩に涙せぬ者はいませんでした

晶子葉書 小日山直登宛
 (昭和10年5月18日消印)

御うたわざしく御送り下され
 ありがたく存じ申候。故人の古
 手紙などを整理致し候ために
 また二三日悲しくのみおもひくらし候。
 五十日が逆に帰りこし如くに候。
 ご機嫌よろしきやう祈り上げ候。



「還暦記念繪葉書」3枚1組

昭和8年2月に鉄幹の満60歳の誕辰祝賀会のために製作されたもの。
 雑誌「明星」第1号、鉄幹詩歌集『東西南北』『天地玄黄』の表紙、
 自宅で撮影された与謝野夫妻の肖像写真が印刷されている。

(解説 / 学芸員 森下明穂 : 与謝野晶子文芸館図録より抜粋)

おおさが昔と今 311

文 三善 貞司 (地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (163)

与謝野晶子 16

「光源氏のようなお人」―寛へ 生涯変わらぬ愛情と尊敬

晶子の壮絶な生涯をたどった最後に、私の思いをまとめておきます。

明治から大正にかけての日本男性が、どんなに横暴でわがままだったか、亭主関白どころではない身勝手さに、まず驚きあきれます。寛は鉄幹と称した時代、恋愛こそが封建的な社会通念に束縛された自我を解放する手段だと主張、卒業生と同居したり教え子を妻にして、それぞれひとりずつの子どもが生まれます。

さらに晶子に接近し、山川登美子にも恋情を寄せた全く倫理観念の欠如しただらしない男です。現在も不倫を純愛だと誤解したようなドラマがいつも放映されていますが、倫理とは人間が最低守らねばならぬ人の道です。不倫は美化されて許されるものではありません。

晶子と結婚してからも、11人もの子どもの養育を押しつけ、家事は無論、生活の費用までおんぶにだっこでした。そのくせ彼の浮気ぐせは止まらなかつたらしく、

髪あまた蛇頭するおもて面ふり君にものいふ我ならなくにわが頼む男の心うごくより寂しきは無し目には見えねど不可思議は君が二つに分つ恋われかたはしも欠かであることなどの晶子の詠歌が残っています。夫に腹を立て嫉妬する妻の姿が浮かんできます。

しかし親兄弟の猛反対を押しきり、世間の非難や嘲りあざわらひにも屈せず、豊かな生家を捨て無一物で貧乏な寛のおしかけ女房になった晶子です。かつて娘時代に鉄幹を「光源氏のようなお人」とまぶしく見つめた純粋な愛情と尊敬の念は、どんなに経済的に苦しくても冷たくされても、一生失うことはありませんでした。逆に言えば寛の妻を

苦しめた行為や態度が、いっそう彼女の詩歌を芸術的に深めていったのです。

中年期に入り鉄幹の短歌革新運動「明星」は光を失い、ついに廃刊になって寛は忘れられていきます。はつきり言って文学的才能や古典の教養・鑑賞能力は、はるかに晶子のほうが上です。それでも寛は晶子を指導してきたとの自負心を捨てきれませんでした。世間が晶子に拍手を贈るたびにひねくれ、事ごとく冷たくあしらいます。妻をたて、マネージャー役になつて支えることは、とうてい寛にはできない。

恋をつらぬき、業績を残す 五百年に一人の女性

荒れずさんでいく夫を、晶子は献身的に支えます。ヨーロッパ旅行や衆議院議員への立候補など存分に好きなことをやらせ、夫を小馬鹿にしたり軽蔑したりすることは、まったくくない。どんなに夫が色あせても、終生鉄幹は文芸の指導者であり、自分をリードする人生の水先案内人だと尊敬します。そんな晶子を苦しめ、わがまま放題をしながら寛には、十分に妻の

気持ちがあつていました。皮肉を飛ばして傷つけながら、心の中では手を合わせていたのではないのでしょうか。

詩歌ではとてもかなわぬと思つたのか、寛は慶応大学の教授に就任してからは、言語学の研究を始めます。このジャンルなら晶子は無知です。教えてやりながら少しずつとりもどした自信が、晩年の円満な夫婦旅行につながります。しかしそんな夫に晶子は不足を感じます。

わが背子せごは世の嘲りを聞くたびに筆をばおきて物を思へるわが背子せごに四十路ちかづくあはれにも怒らぬ人となり給ふかな（背子は夫のこと）夫婦とは実にふしぎなものです。現在も女性の自立、女性の解放が叫ばれ、晶子をその先駆者のように持ち上げる方もおられますが、単なるウーマンリブとは違います。たった一度の恋をつらぬき、これほどの業績を残した晶子は、今では「五百年に一人しかでない女性だ」と言われていますが、あたり前でしょう。

堺市立文化館（JR阪和線堺市駅前）の「与謝野晶子文芸館」に、彼女の生涯が展示されています。



「晶子 初孫と」(鞍馬寺蔵) 昭和5年
昭和2年から亡くなるまでを過ごした
東京・荻窪の家のサンルームで。

昭和6年、晶子は寛や歌友たちと共に、
群馬県の法師温泉に遊んだ。
旅館・長壽館の前で駕籠に乗る晶子(先頭)。
長壽館は国登録有形文化財として登録され、
現在も当時の姿を留めて営業している。

「法師温泉を訪れた晶子」(三国路与謝野晶子紀行文学館蔵)



リバティサロン 演劇集団 agasa 公演

与謝野晶子没後 70年記念 **山の動く日来たれ**

6月3日(日) 14時開演 (13時開場)

会場：大阪人権博物館 リバティホール 浪速区浪速西 3-6-36(JR 環状線芦原橋下車徒歩南へ約 600m)

参加費：当日 1000円 事前申込み 800円 Tei.6561-7173 Fax.6561-5995(電話は10時～17時)

3組6名様ご招待
ご応募は26頁参照



女性も経済的に独立すべきだと唱えた与謝野晶子。
子どもを産み育てる社会的な母の仕事に国家の保護をと主張した平塚らいてう。
世にいう「母性保護論争」を今一度振り返り、
これからの女性と男性の生き方を考えてみませんか？

演劇「山の動く日来たれ」より

おおさが昔と今 312

文 三善 貞司 (地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。